高橋教授の

この人に会いたい

Vol.109

ゲスト

稲葉緑子氏

株式会社 Inaba Promote 代表

映画『361-White and Black-』の「361」とは、囲碁の19路盤、19掛ける19の交点の数である。囲碁番組の司会を長年務めた稲葉緑子氏は、囲碁界をもう一度、盛り上げたいとこの映画の制作を支えた。その覚悟の背景を高橋教授が聞いた。

映画『361-White and Black-』に込めた、囲碁という共存の哲学

映画に込めた哲学とは

高橋　本日は、囲碁インストラクターであり、囲碁番組の司会を長年務めている稲葉緑子さんにお越しいただきました。稲葉さんは、映画『361-White and Black-』の製作にも深く関わられました。まず、この「361」の意味から教えてください。

稲葉　囲碁の碁盤は、19本の縦線と19本の横線でできています。その交点が、19掛ける19で361点あります。最初は何も置かれていない盤上に、黒と白の石が一手ずつ置かれていく。すると、ただの線と点だった場所に、だんだん一つの世界が立ち上がっていきます。それが囲碁の面白さです。

高橋　つまり「361」には、碁盤全体、さらにはそこに生まれる世界そのものが込められているわけですね。稲葉さんは、この映画に単に助言者として関わったのではなく、私財を投じて製作を支えたとうかがいました。そこまでして、なぜ映画にこだわられたのでしょうか。合理的に考えれば、映画は時間もお金もかかり、リスクの大きい表現です。それでも人は、あるテーマをどうしても映画にしたくなる。稲葉さんにとって、この映画はどのような意味を持っていたのでしょうか。

稲葉　まず、たくさんの方に応援していただき、この作品は、囲碁界みんなでつくった「結晶」だという想いが、私の中ではあります。ですが、もろもろ大変で、結果、私財も投じることになりました。次に意味ですが、一つには、下火になっている囲碁界をもう一度盛り上げたいという思いがありました。かつて日本の囲碁人口は1200万人いたと言われていますが、現在は120万人程度にまで減ったと言われています。特に地方での減少は深刻です。昔は町の碁会所に自然と人が集まり、年齢も職業も違う人たちが碁盤を囲んでいました。ところが、そういう場が少しずつ失われています。

高橋　競技人口が減ったというだけでなく、囲碁を通じて人が出会う場所そのものが減っているわけですね。

撮影＝関口宏紀



稲葉　そうです。囲碁の面白さを知る前に、囲碁に触れる機会がなくなっている。だからこそ、囲碁を知っている人に向けた映画ではなく、囲碁を知らない人に届く映画を作りたいと思いました。ルールを覚えてください、強くなってください、というより、盤上に、あなたの生き方や人生観を投影するものだということを感じてほしかったのです。

高橋　囲碁界には、かつてもっと大きな熱気があったわけですね。

稲葉　はい。武宮正樹九段が「宇宙流」と呼ばれる、圧倒的にスケールの大きな打ち方で世界一になられた時代がありました。世界中のファンがその打ち方に憧れ、真似をした。あのころの囲碁には、夢がありました。小さく得をするのではなく、大きな構想で盤面全体を包み込むような碁です。

高橋　現代は、タイパやコスパが重視され、短い時間で効率よく成果を出すことが求められます。宇宙流のような大きな構想とは、対照的にも見えます。

稲葉　もちろん効率も大事です。でも、それだけで人生を決めてよいのだろうか、という思いがありました。好きなことを基準に、もう一度人生を組み立ててもよいのではないか。遠回りに見えても、自分が楽しいと思えることを大切にしてよいのではないか。映画では、そういうことを伝えたかったのです。

高橋　稲葉さんには『囲碁と悪女』という著書もあります。あの本は、囲碁の周辺で生きる主人公の交遊録であり、遠藤周作さん、小沢一郎さん、堀江貴文さんなど、驚くような著名人が囲碁を通じてつながっていく物語でもあります。この交遊録が、映画へ向かう伏線だったようにも感じます。

稲葉　囲碁は不思議なもので、碁盤を挟むと、肩書きや立場が少し横に置かれるんです。作家でも、政治家でも、経営者でも、石を置けばその人の人柄が出ます。欲張る人もいれば、我慢する人もいる。相手との距離をよく見ている人もいる。私は囲碁を通じて、本当に多くの方と出会いました。



映画『361』は、囲碁を知らない人にも届く人生の余白を描いた作品です——稲葉

高橋　つまりこの映画は、単なる囲碁普及映画ではなく、稲葉さんが囲碁を通じて見てきた人間模様の集大成でもあるわけですね。

稲葉　そうかもしれません。囲碁のルールを説明したかったのではありません。碁盤の上に人間が現れること、人と人が出会い、一つの世界を作っていくことを描きたかったのです。

二人の政治家による公開対局を企画

高橋　その「人柄が出る」という意味では、小沢一郎さんと与謝野馨さんの公開対局も非常に象徴的です。あの対局は、どのようないきさつで実現したのですか。

稲葉　小沢さんとは以前から知り合いで、時々碁を教えていました。与謝野さんも若い頃から囲碁界に通じた大の囲碁好きでした。お二人の名前が政界で大きく取り沙汰されていた時期に、囲碁仲間の後藤田正純さんから「二人が打ったら面白いのではないか」と提案をいただいたんです。それなら公開対局として盛り上げようということになりました。

高橋　下馬評では、与謝野さんの方が強いと言われていたそうですね。

稲葉　はい。与謝野さんはプロとも勉強され、定石にも明るく、玄人受けするきれいな碁を打たれる方でした。一方の小沢さんは、定石を細かく知っているというより、自分のやりたいように打つ。おおらかで、人間味のある自分流の碁です。普通なら与謝野さんが勝ちそうです。

高橋　ところが結果は小沢さんの勝ちでした。

稲葉　与謝野さんが少し小沢さんを甘く見て、石を取りにいったところ、逆に小沢さんの外側が厚くなって損をしてしまいました。小沢さんは普段は早打ちなのですが、その時は何時間も真剣に考え込まれました。結果は小沢さんの勝ちでした。

高橋　その後、「政治的意図があって、与謝野さんがわざと負けたのではないか」とも言われたそうですね。

稲葉　そういう報道もありました。でも私は、与謝野さんの本当に悔しそうな表情を見て、お二人は間違いなく真剣勝負をしていたのだと確信しました。政治の世界では見えにくい素顔が、碁盤の上には出ます。小沢さんも強面のイメージがありますが、実際にはとてもチャーミングな方です。終局後の検討でこちらが指摘すると、最初は我を通そうとされますが、きちんと説明すると最後には「あ、そうでしたか」と納得してくださるんです。

高橋　囲碁は、人間の欲や我慢、相手との距離感が出る。だからこそ、映画にする意味があったのですね。

稲葉　そうです。ただ、映画を作るのは想像以上に大変でした。監督が何度も変わるなど、本当に苦労しました。それでも私は、あえて囲碁を打たない人に監督をお願いしたいと思っていました。囲碁を知っている人が作ると、どうしても「囲碁の良さとは」「囲碁のルールとは」という説明になりがちです。でも私が描きたかったのは、説明ではなく、囲碁の奥にある世界観でした。

高橋　囲碁を知らない監督だからこそ、囲碁を物語として描けたわけですね。

稲葉　そう思います。監督は囲碁のルールを知りませんでしたが、私の話を深く理解してくれました。囲碁は、相手を完全に消してしまうゲームではありません。相手に地を譲りながら、自分も地をもらう。そのぎりぎりの共存のラインを探っていくゲームです。私は囲碁を、真っ白な画用紙に二人で一つの絵を描いていくようなものだと思っています。監督は、その世界観をストーリーに落とし込んでくれました。

高橋　映画は小さなハリウッドの映画祭でも賞を受け、上映館も広がったそうですね。劇場での反応はいかがでしたか。

稲葉　当初は10館ほどでしたが、全国で40館以上に増えました。うれしかったのは、上映が終わっても、エンドロールまで誰も席を立たないことです。そして最後に拍手が起きる。あの光景を見た時、映画を作ってよかったと思いました。

高橋　特に印象に残っている場面はありますか。

稲葉　日本棋院でプロ棋士の方々が盤を囲み、検討しているシーンです。監督が「皆さんの囲碁への熱い気持ち、楽しいという思いを出してください」と熱く指導され、本当に素晴らしい熱量のシーンになりました。撮影が終わった後、監督と二人で「このシーンを撮るために、ここまで苦労してきたんだね」と号泣しました。

高橋　その熱量が、観客にも伝わったのですね。

稲葉　監督はよく、この映画にはあえて「余白」を作っていると言います。すべてを説明するのではなく、観た人がそれぞれの思いで余白を埋めた時に、初めて映画が完成するのだと。私は、それは囲碁そのものだと思います。碁盤も最初は何もない。その余白に、二人が石を置き、意味を作っていくのです。

高橋　囲碁も映画も、余白を持った表現である。勝ち負けを超えて、相手と一つの世界を作る。そこに、現代社会に必要な共存の哲学があるように感じました。本日はありがとうございました。

稲葉　ありがとうございました。

稲葉禄子
Yoshiko Inaba

株式会社 Inaba Promote代表

いなば・よしこ●兵庫県神戸市生まれ、埼玉県育ち。6歳で囲碁を覚える。1986、87年、囲碁全国高校選手権大会の団体女子に主将として出場し優勝（連覇）。89年、富士短期大学経営学科卒業。92年、NHK「囲碁の時間」の司会に抜擢され、以降さまざまな囲碁番組に出演。テレビ番組出演は2000本以上。2017年、『囲碁と悪女』（KADOKAWA）を出版。囲碁映画「361- White and Black-」をプロデュース



囲碁は、勝ち負けを超えて相手と一つの世界を作るゲーム である——高橋

高橋 泰
Tai Takahashi

国際医療福祉大学教授

たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了（医学博士）後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた